



令和2年12月10日

住宅用火災警報器の設置で住宅火災の被害軽減！

～定期的な点検と設置後10年を目安に本体交換をしましょう～

住宅用火災警報器（住警器）は、東京都火災予防条例により、平成16年10月から新築の住宅に、平成22年4月からは全ての住宅に設置が義務化されました。過去10年間の奏功事例は2,944件、そのうち火災初期での奏功件数は1,725件と半数以上を占めており、住宅火災の被害軽減に役立っています。

しかしながら、設置の義務化から10年以上が経過し、機器の耐用年数である10年を超えた住警器が多く存在していることが予想され、いざという時に警報が鳴らないことが懸念されます。

住警器を定期的に点検するとともに、設置後10年を目安に機器本体を交換しましょう。

1 住警器の状況について

(1) 住警器等の設置率及び住宅火災件数等の推移

ア 人口10万人当たりの住宅火災件数は、住警器の設置義務化以降、減少傾向にあります（図1参照）。

イ 人口10万人当たりの住宅火災による死者数は、設置率の上昇とともに減少傾向にあります（図2参照）。

ウ 住宅火災の焼損程度の割合は、ぼや火災が緩やかに増加しており、部分焼以上の火災は緩やかに減少傾向にあります。これは、住警器の鳴動が、早い発見・通報・初期消火に繋がっていることが一因として考えられます（図3参照）。

※住警器等とは、住警器の他に自動火災報知設備などの設備を含みます。

(2) 住警器等設置有無別の比較

ア 令和元年中の住警器等設置の住宅における火災と、未設置の住宅における火災を比較すると、火災1件当たりの平均焼損床面積は、住警器等設置住宅においては、4.4㎡となっているのに対し、未設置住宅では19.6㎡と約4.5倍に、火災1件当たりの平均損害額でも、住警器等設置住宅は約104万円であるのに対し、未設置住宅では約376万円と、約3.6倍になっており、未設置住宅における被害が大きくなっています。（図4、図5参照）。

イ 住宅火災による死者発生状況を住警器等の設置状況別にみると、火災100件当たりでは住警器等設置住宅で3.0件、住警器等未設置住宅の場合は10.3

件で死者が発生しており、住警器等設置住宅の約 3.4 倍、死者発生件数が多くなっています（図6参照）。

ウ 最近10年の推移を住警器等設置状況別にみると、火災1件当たりの平均焼損床面積、火災1件当たりの平均損害額、火災100件当たりの死者発生件数ともに、住警器等設置ありの方が、被害が小さくなっています（図7、図8、図9参照）。

エ 住宅火災の焼損程度を住警器等の設置有無別で比較すると、「設置あり」の方がぼや火災の割合が多く、半焼・全焼の割合が小さくなっています。これは、住警器等の鳴動が、早い発見・通報・初期消火に繋がり、焼損程度を低く抑えられると考えられます。（図10参照）

オ 住警器の鳴動に気付いた人別の件数をみると、居住者が85件（43.4%）で、居住者以外は80件（40.8%）となっています。居住者以外の内訳は隣人が87.5%を占めており、外出中や就寝中などに火災が起こっても隣人等が気付く場合も多くあります（図11参照）。

(3) 住警器の奏功事例

住警器の奏功事例は、別添え1のとおりです。

2 住警器の設置と維持管理のポイント

(1) 住警器を設置することで、火災を早期に発見し、速やかな通報や消火、避難が可能となり、被害を防止・軽減することができます。

住警器を各居室、台所、階段に必ず設置しましょう。

(2) 設置から10年が過ぎている住警器は、電子部品の劣化等による故障や電池切れにより、火災を感知できなくなる可能性がありますので、機器本体を交換しましょう。

(3) 住警器は、定期的に（少なくとも半年に1回以上）ご自分で点検しましょう。点検は、本体のボタンを押す、又は付属のひもを引くことで実施でき、正常な場合は正常を知らせる音声や警報音が鳴ります。

(4) 火災が発生すると、全ての部屋の住警器が一斉に鳴動する「連動型」の住警器や、インターホン等と連動して屋外に火災の発生を知らせる「屋外警報装置」付き住警器を設置すると、より安心です。

3 住警器の適正な設置と点検・交換の呼びかけについて

東京消防庁では大掃除の時期などを捉え、様々な媒体を活用して住警器の適正な設置と点検・交換を呼びかけていきます。

(1) 東京消防庁ホームページによる呼びかけ

住警器の維持管理に関する特設ページを開設し、点検方法や住警器の効果について紹介します。

住警器の維持管理に関する特設ページ



<https://www.tfd.metro.tokyo.lg.jp/camp/2020/202012/camp4.html>

(2) 年末大掃除時期を捉えた SNS による呼びかけ

多くの方が12月に行う大掃除は、家の中の様々なものを整理し更新するタイミングであることから、「#大掃除で防火対策」というハッシュタグを用いて、Twitter 及び Facebook で出火原因の排除、住警器の点検・交換等を呼びかけます。

また、全国の消防本部に対して同じハッシュタグ（#大掃除で防火対策など5種類を提案）を用いた同時期一斉発信を呼びかけ、様々な組織・媒体が連動したムーブメントを醸成します。

(3) 広報動画による呼びかけ

人気お笑いコンビ「ティモンディ」が出演し、住警器の適切な時期での本体交換や定期的な点検などの維持管理の必要性を幅広い世代に呼びかける内容です。当庁ホームページや SNS に掲載するほか、街頭ビジョン等でも放映される予定です。（別添え2参照）

(4) 都営地下鉄線の中塗り広告と車内モニターによる呼びかけ

12月21日（月）から27日（日）までの間、都営4線の全車両（1,166車両）に、大掃除と合わせた点検・交換を呼びかける中吊り広告を掲出します。また、モニターが整備されている全車両で(3)の広報動画を放映します。（別添え2参照）

問合せ先

（東京消防庁（代）3212-2111
防災安全課 生活安全係 内線 4195
広報課 報道係 内線 2345
城東消防署 03-3637-0119）

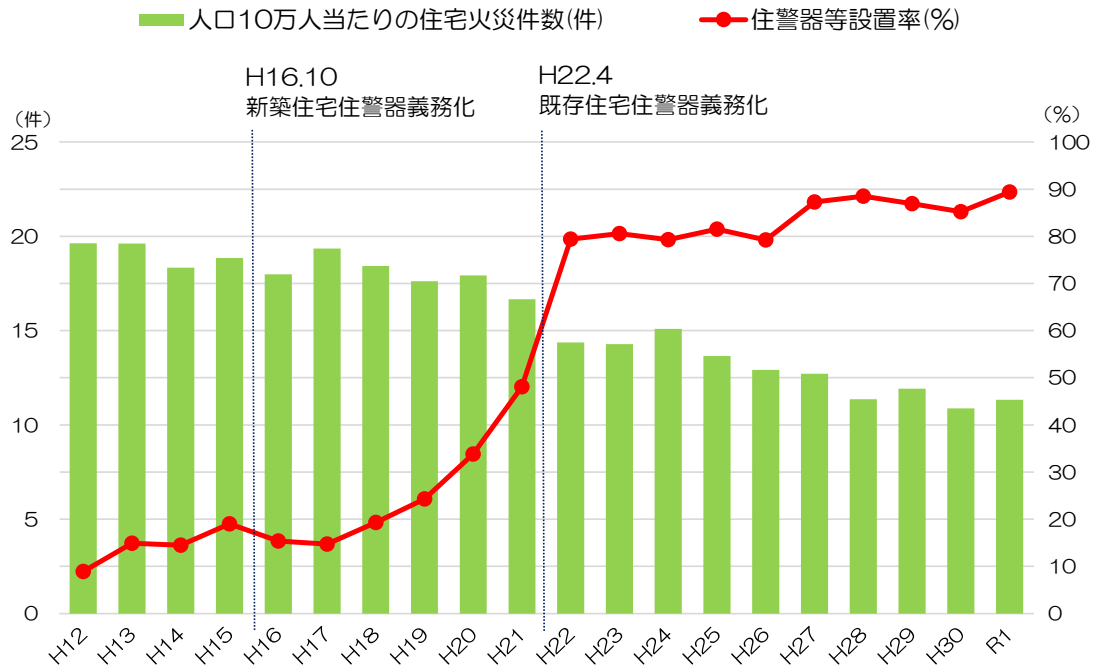


図1 人口10万人当たりの住宅火災件数と設置率の推移

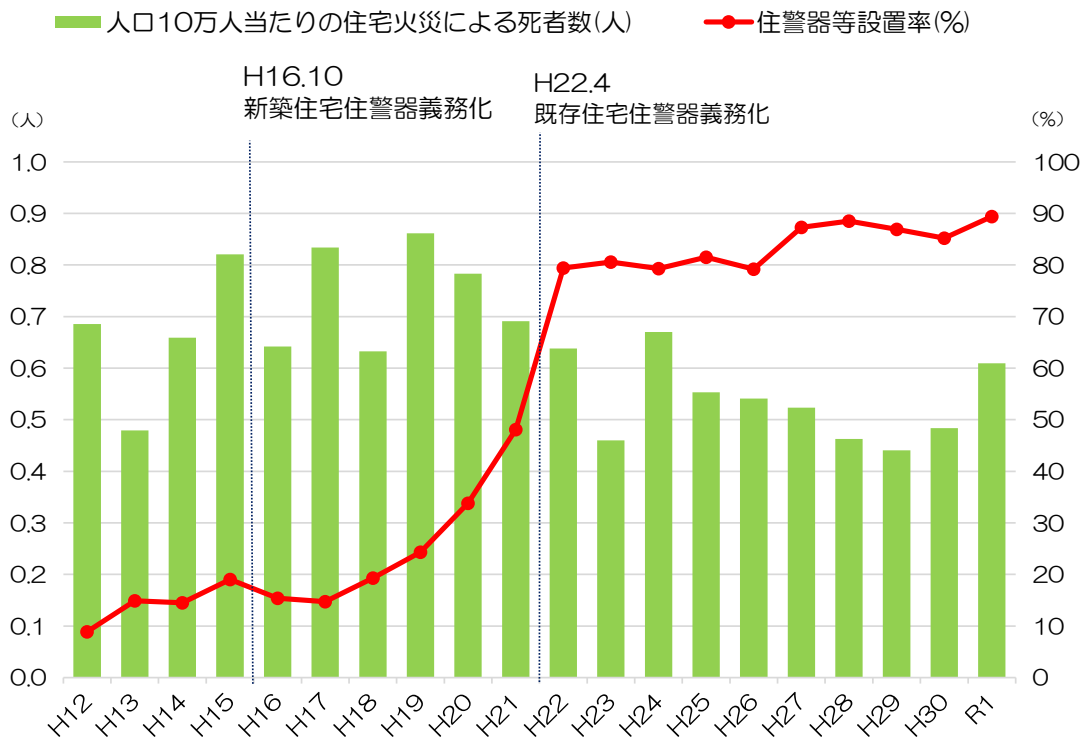


図2 人口10万人当たりの住宅火災による死者数と設置率の推移

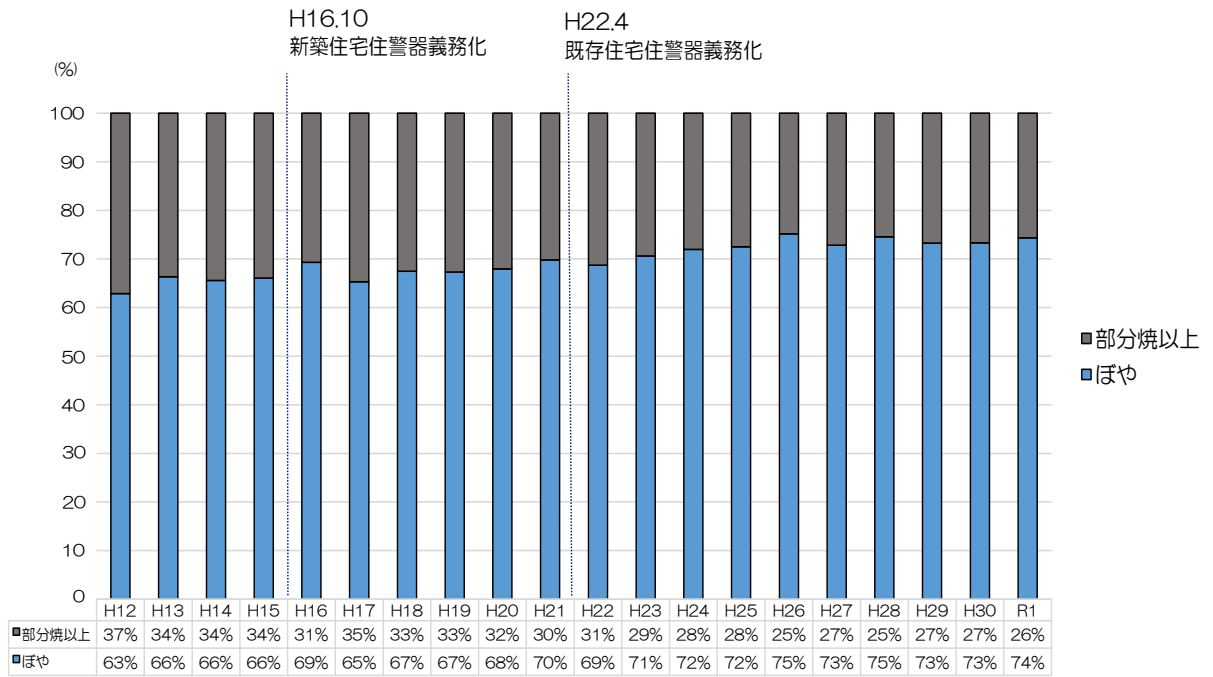


図3 住宅火災の焼損程度の割合の推移

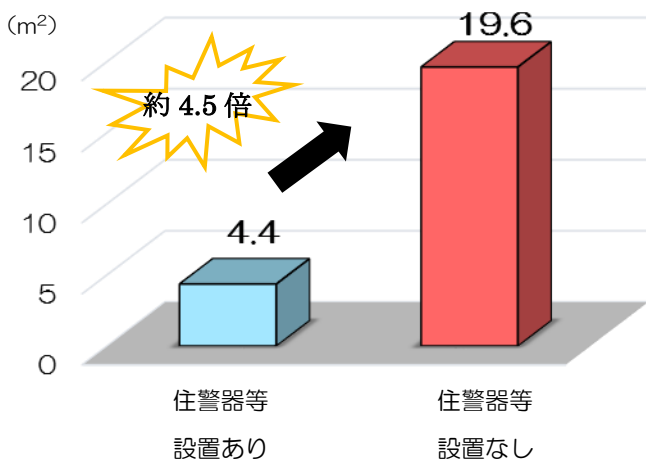


図4 火災1件当たりの平均焼損床面積 (R1)

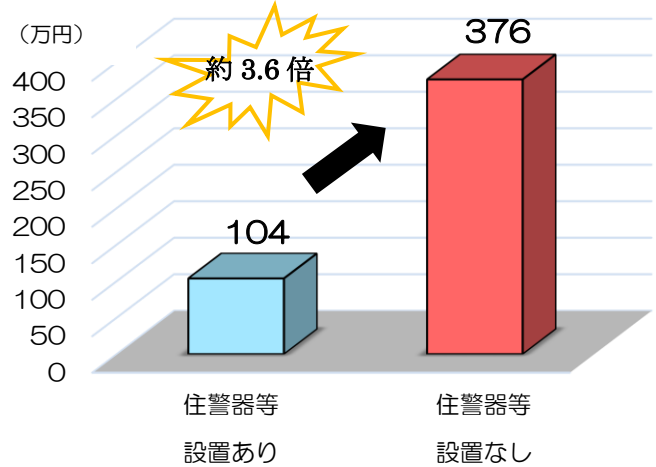


図5 火災1件当たりの平均損害額 (R1)

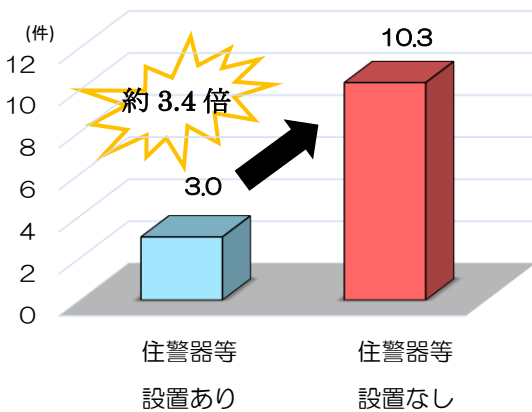


図6 火災100件当たりの死者発生件数 (R1)

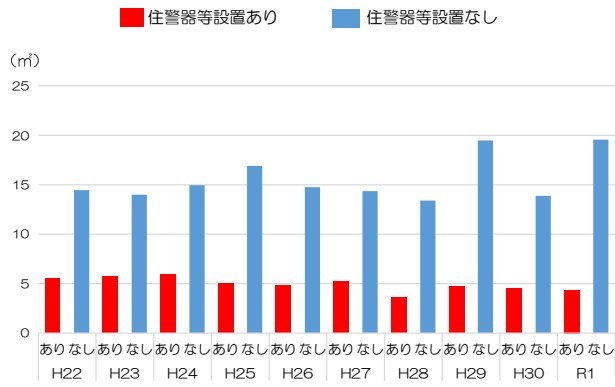


図7 火災1件当たりの平均焼損床面積の推移

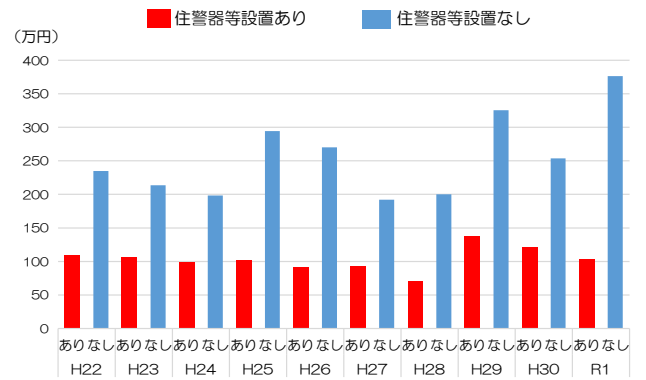


図8 火災1件当たりの平均損害額の推移

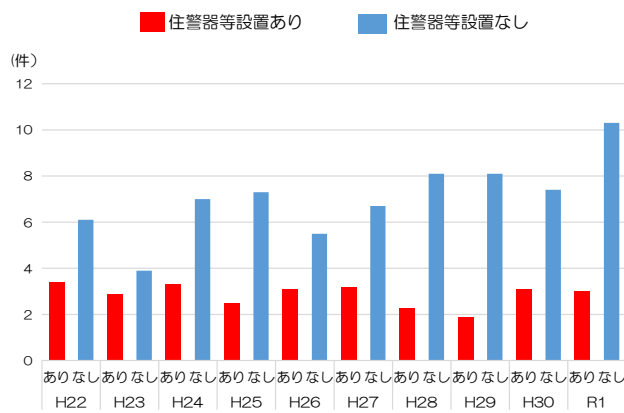


図9 火災100件当たりの死者発生件数の推移

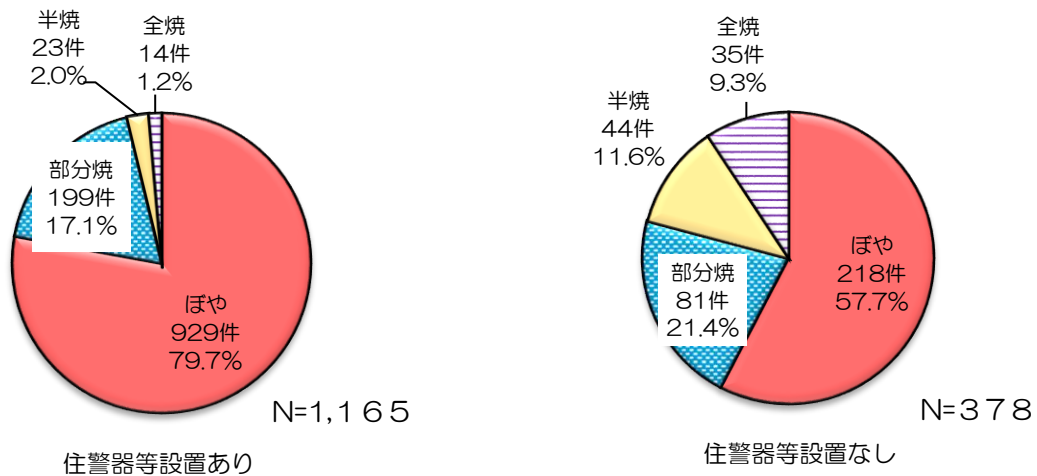


図10 火災焼損程度の比較 (R1)

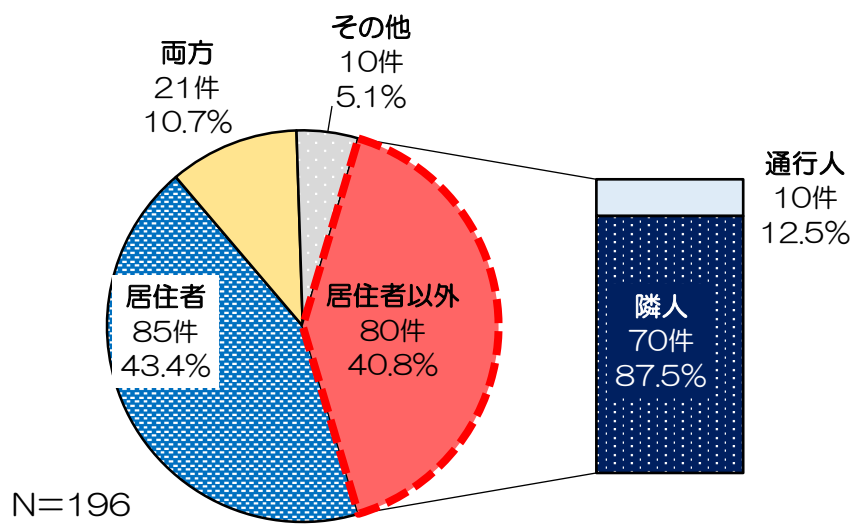


図11 住警器の鳴動に気付いた人別の件数 (R1)

住警器の奏功事例

【被害の軽減につながった事例】

●別の部屋にいた妻が鳴動に気付いた事例

夫が2階寝室でたばこを吸いながら眠ってしまったため、たばこが布団に着火して出火した。1階にいた妻が、2階の住警器の鳴動音に気づいて夫の寝室へ行くと、室内に白煙が充満していたため、119番通報し、台所で洗面器に水を汲み布団にかけ、初期消火を実施した。

●下階の鳴動に気付いた事例

男性が自宅の3階にいたところ、2階から住警器の鳴動音が聞こえたので2階へ降りると、断線して床に落下した電気コードから炎が3～5cm立ち上っているのを発見した。すぐに電気コードから出ていた炎を自分の息で吹き消し、119番通報した。

●連動型住警器の鳴動により、早い発見につながった事例

娘が2階寝室で電気ストーブのスイッチを入れたまま就寝したため、掛け布団が電気ストーブに接触して火災になった。寝室に設置してある住警器の鳴動音で目が覚めると、同時に1階リビングにいた家族も連動型住警器が鳴動したため駆けつけることができた。

浴室に掛布団を運びシャワーで消火後、119番通報した。

【火災を未然に防いだ事例】

●隣人が気付いた事例

女性がこんろの火を消したつもりで外出してしまったところ、鍋が空焚き状態となって煙が発生し、住警器が鳴動した。隣人の男性が住警器の鳴動音と煙に気づき、119番通報を行った。到着した消防隊がこんろの火を止め、火災には至らなかった。

●就寝中に鳴動で目が覚めた事例

男性は飲酒後、鍋をこんろの火にかけたまま寝込んでしまった。発生した煙により住警器が鳴動したため、男性は鳴動音に気づき目を覚ました。すぐにこんろの火を止めることができたため、火災には至らなかった。119番通報については、隣室居住者が住警器の鳴動音に気づき通報していた。

広報動画イメージ



都営地下鉄線の中刷り広告イメージ

